# 向原遺跡（概要）

1985年3月

武川村教育委員会

# 目　　次

1．発掘調査にいたるまでの経過
2．遺跡の立地と環境
3．調 査 の 概 要
4．発見された遺構
5．出　土　遺　物
6．ま　　と　　め

挿　図
1．向原遺跡位置図
2．向原概念図（概置図）
3．向原遺跡土器拓影（縄文中期前半）
4．向原遺跡土器拓影（縄文中期末葉）
5．向原遺跡土器拓影（縄文時代後期）

# 調 査 体 制

遺　跡　名　向原遺跡
所　在　地　北巨摩郡武川村
期　　間　昭和59年８月18日～８月31日
現地説明会　８月27日・28日
調 査 主 体　武川村教育委員会
調査担当者　里村晃一
調 査 指 導　小林広和
調 査 協 力　山梨大学遺跡調査会

## 1．発掘調査にいたるまでの経過

武川村には多くの遺跡が存在して「全国遺跡地図」（文化庁1981）には７ケ所の縄文時代から歴史時代の遺跡が登録されている。

向原遺跡の発見は、昭和50年度遺跡分布調査（村教育委員会）によって、山道のカット面より数点の縄文後期土器片が人頭大の焼石数点と伴に検出され、埋蔵包蔵地として初めて確認されるに至った。

現状は北斜面の松林であり、地表に現れる遺物も少く遺跡の発見をおくらせた要因となったが、一方保存状態の良好なものとした。

その後、昭和58年８月10日から20日の間、山梨大学遺跡調査会による、武川村遺跡分布調査が行われ、従来の縄文後期に、縄文中期曽利Ⅳ式土器と平安時代の資料を加えて、村内における唯一の重複遺跡である事を確認した。さらにこの分布調査により遺跡数も10ケ所増加して17ケ所とした（第２図）。

武川村内での正式な発掘調査は、昭和57年度に真原遺跡が（甲府盆地石器文化グループ）により実施されており、曽利Ⅱ式期の住居址１軒とそれに伴う一括土器を検出している。

今回の発掘調査は、真原遺跡で発見された曽利Ⅱ式の前後関係の集落検出を目的として調査団を結成した。

## 2．遺跡の立地と環境

武川村は富士川上流釜無川西岸に立地し、細長い盆地状を呈している。周囲には急峻な山がせまって、村の中央部には、鳳凰山系を源とする大武川が東西に釜無川に流れ込む。この大武川に併行するかの様に黒沢川をはじめ大小の河川が東西に流れ、このため河川に沿った丘陵は、東西に細長く形成されている。この河川に沿った段丘、微高地上に、先史（縄文）から歴史時代の各時期にわたって集落が営まれたらしく、土器、石器の発見が各所で認められている。

武川村では特に縄文時代の遺跡が多く分布しており、当地域が狩猟、採集活動を中心とした人々にとって住みやすい生活環境であったことをうかがわせる。

遺跡の分布は、石空川流域の微高地集落と黒沢川沿いの中位段丘上の集落に分けられ、特に黒沢川沿に分布は密集する（第２図）。内容は石空川流域には４ケ所の縄文後期遺跡がある。黒沢川では、北岸南斜面上に10ケ所が認められるが、縄文中期、五領ケ台期から曽利期、平安時代と長い期間に使用された地域であることがうかがえる。

黒沢南岸では、向原遺跡と新奥遺跡の２ケ所が確認される、新奥遺跡は小武川に面して日当りの良い南斜面に位置し、縄文中期中葉井戸尻期の大集落が認められる。この新奥遺跡から１㎞以内の至近距離に向原は存在し、黒沢川に沿った北斜面上にある。

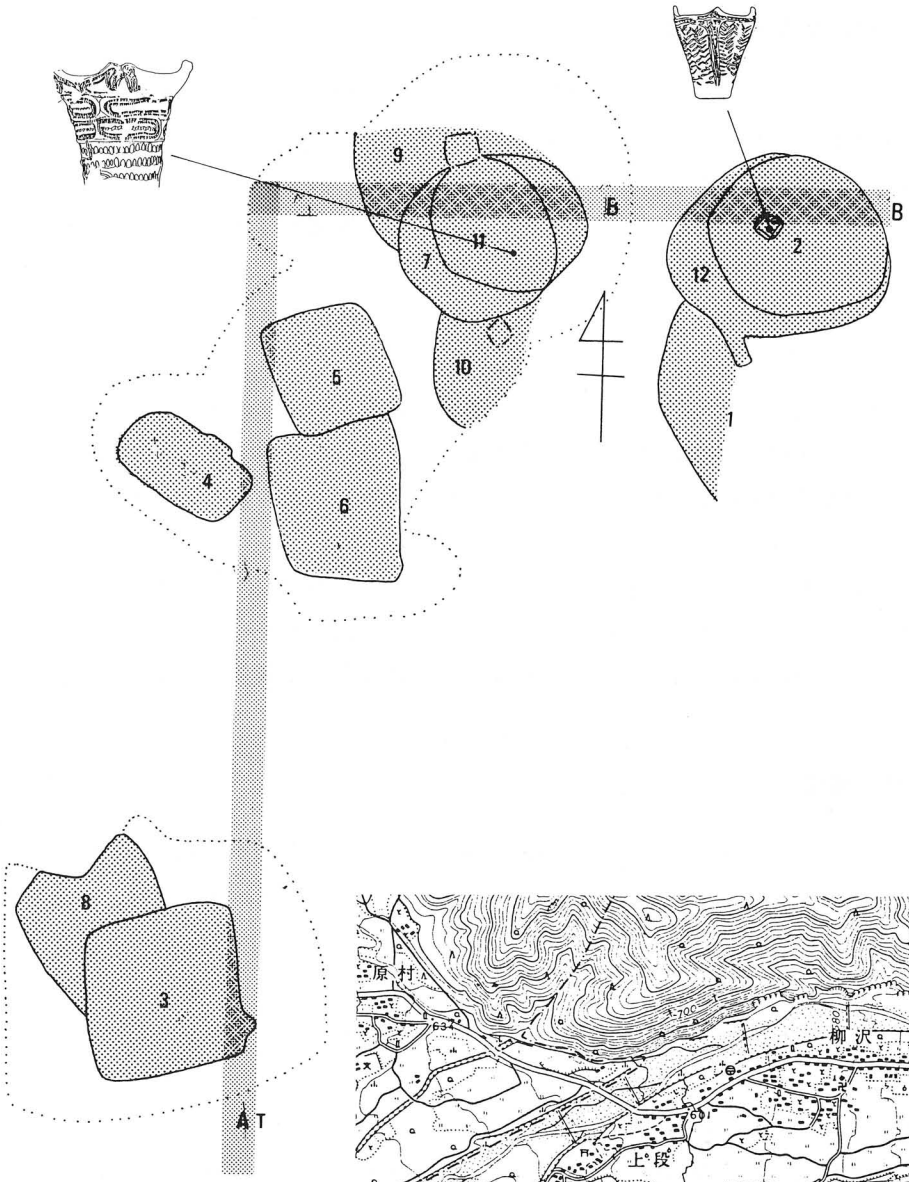



図　1　向原遺構配置図

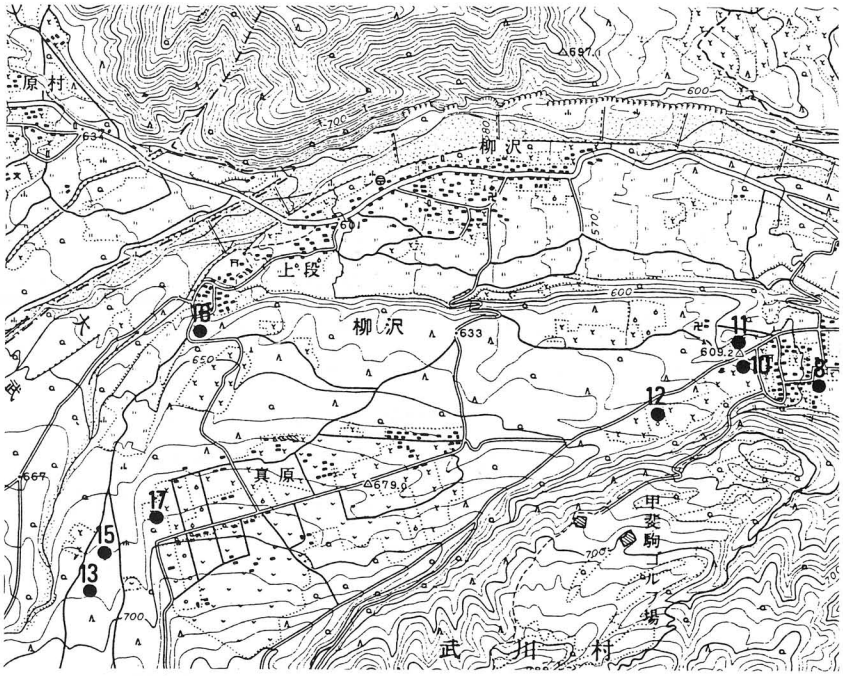



図　2　武川村遺跡分布図（山梨大学遺跡調査会1983年度）

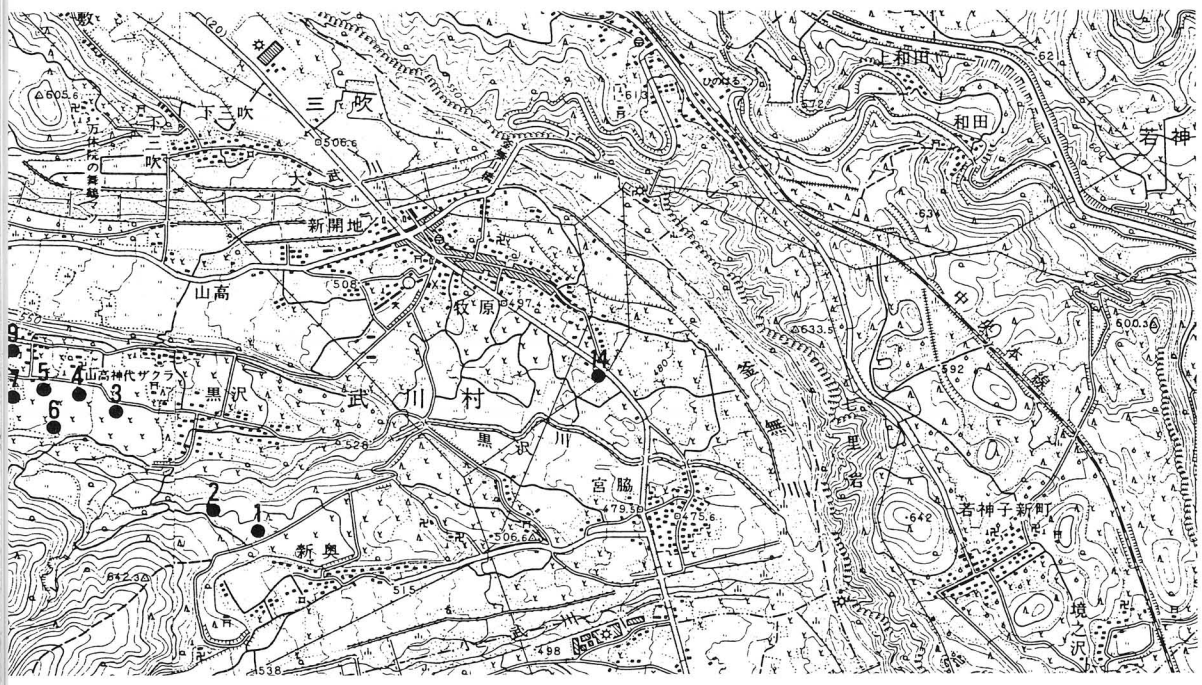
## 3．調査の概要

発掘調査は遺跡に巾１ｍ×20ｍのトレンチを東西南北に「Ｌ字」状に設定することから始った。トレンチは現状が、私有の松林であるためできるだけ立木の間をぬって設定し、現状維持を保つことに配慮した。表土剥ぎは遺物の出土状況、出土層位の観察を行いながら作業を進めていく。

その結果、Ａトレンチ南端、北端にローム層に黒色土が混入した状態が認められ、拡張を行う。Ｂトレンチでは、西、東端に遺構の一部が検出され、それぞれの拡張を行った。その結果４ケ所の単位に遺構が確認され、調査班を四班に分け同時に遺構掘り下げを行う。その結果Ｙ８号→Ｈ３号、Ｈ４号・Ｈ６号→Ｈ５号、Ｊ11号→Ｊ７号→Ｊ10・Ｊ９号、Ｊ１号→Ｊ12号→Ｊ２号の重複関係が認られた。

**８月18日**（晴れ）１号址　セクションの清掃、生活面の確認、住居内を発見。３号址　セクションの清掃、生活面の確認、焼土を発見。
**８月19日**（晴れ）１号址　床面の確認。３号址　床面の確認、かまど検出。４号址　床面の確認、多量の木炭発見。
**８月20日**（晴れ）１号址　清掃、写真撮影、エレベーション図作成。２号址　住居内の掘り下げ。出土した遺物の図面作成。３号址　住居内の掘り下げ。午後セクションの断面図作成。４号址　住居内の掘り下げ。５号址　住居内の掘り下げ。
**８月21日**（曇のち雨）２号址　住居内を掘り下げ、床面を確認。３号址　清掃、写真撮影。４号址　床面の確認。５号址　清掃の後、写真撮影。セクション図、平面図作成。
**８月22日**（雨、時々くもり）２号址　午前、雨のため土器洗い。ネーミング終了。午後、床面と壁の確認。重複があるらしく床面ははっきり出てこない。炉址を検出。石組を呈する。３号址　ベルトのエレベーション図作成。４号址　精査してセクション図作成。５号址　エレベーション図作成。ベルトの中から縄文式土器３点出土。
**８月23日**（晴れ）２号址　床面と壁の確認、床面３ケ所から焼土確認。３号址　清掃してかまどと遺物の写真撮影、平面図の作成。４号址　ベルトくずし終了。ベルトの中から骨が出土。エレベーション図作成。平面図作成。５号址　エレベーション図作成。かまどの写真撮影。
**８月24日**（曇り）２号址　壁は1／5程残してほぼ確認。エレベーション図作成。３号址　エレベーション図作成。かまどのセクション図作成。４号址　床面の精査。５号址　かまどのセクション図作成。６号址　ベルトを張り掘り下げる。８号址　ベルトを張り掘り下げる。８号址は半分ほど３号址と重複している。
**８月25日**（晴れ）２号址　壁の確認終了。セクション図作成。３号址　清掃の後、写真撮影。５号址　清掃の後、写真撮影。６号址　床面・壁の確認。７号址　ベルトを張り掘り下げる。多数の遺物が出土。８号址　床面と壁の確認。
**８月26日**（晴れ）２号址　ベルトくずし終了。溝を掘ると同時に清掃、ピット捜しを行う。床面、溝中にも遺物検出する。６号址　床・壁を掘り終了。平面図、エレベーション図作成。７号址　床面と壁の確認。８号址　セクション図作成。中央部より炉址と弥生式土器２個体出土。
**８月27日**（曇のち雨）２号址　写真撮影。ピット１ケ発見。６号址　写真撮影。７号址　床・壁の確認。８号址　平面図とセクション図作成。ピット４ケ確認。
**８月28日**（晴れ）午前中遺跡見学会。２号址　写真撮影。６号址　写真撮影。７号址　床面・壁を確認。写真撮影、セクション図作成。８号址　清掃して写真撮影、エレベーション図作成。
**８月29日**（晴れ）２号址　エレベーション図作成。セクション図作成。７号址　炉址。全体の写真撮影。平面図、エレベーション図作成。９号址　７号址に重複して炉址が出土。床面と壁の確認開始。10号址　７号址に重複して炉址が出土。床面と壁の確認。11号址　７号址の真下に位置する。
**８月30日**（曇のち晴れ）２号址　埋甕の写真撮影。９号址　床面・壁の確認。平面図、セクション図、エレベーション図作成。10号址　床・壁の確認。炉址の平面図、セクション図、エレベーション図作成。11号址　床面・壁の確認ほぼ終了。セクションの写真撮影、セクション図作成。
**８月31日**（晴れ）９号址　床面・壁の確認。平面図、エレベーション図作成。10号址　写真撮影。11号址　写真撮影、平面図、エレベーション図作成。全体図、地形図をとり埋めもどしをする。

土層の状態は上から第Ⅰ層の黒色土層で10～20㎝、第Ⅱ層は砂質ローム混りの灰茶褐色土20～30㎝でハードローム層に達する。遺構確認面は、このハードローム層面である。



## 4．発見された遺構

今回発見された遺構は、竪穴式住居、用途不明土壙などがある。これらの遺構は太古の人々の生活空間と結びついて機能した訳で、遺構の発見場所や状況が異なるのはこの様な条件によるものである（第１・２図）。

今回の調査では、トレンチ全面に遺構が確認され、遺跡内の遺構は密集しているものと考えられる。

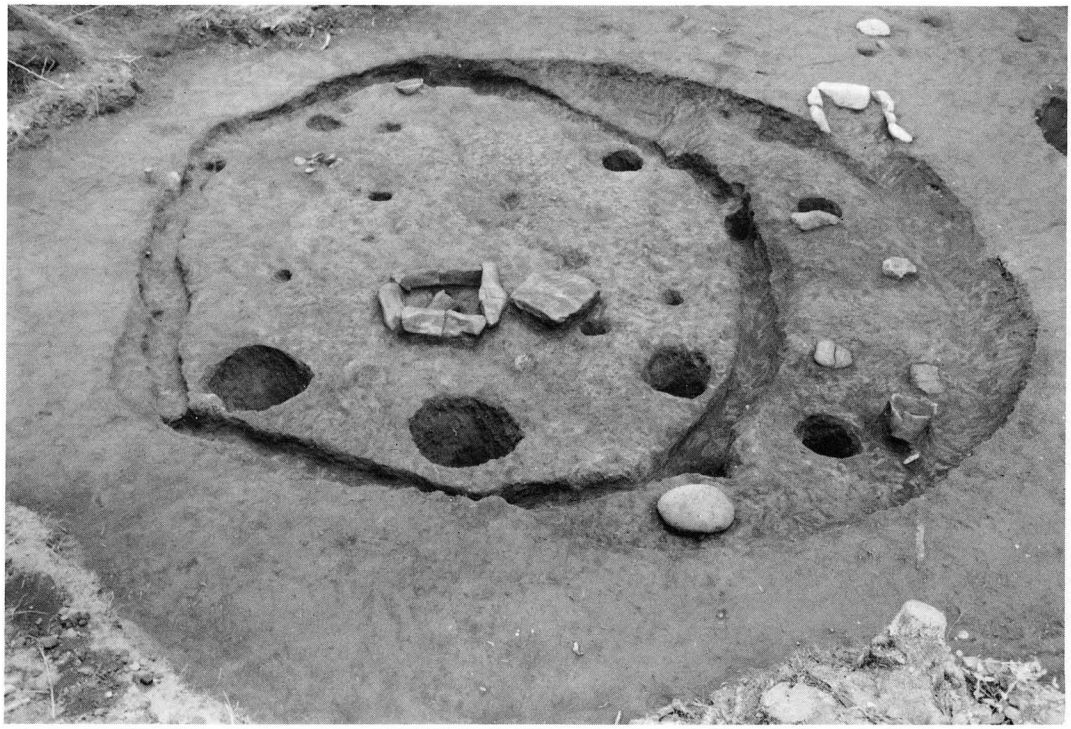
Ａトレンチでは７軒が検出された。トレンチ南端では３号、８号の順に発見された。３号住居址は隅丸方形を呈し、１辺約５ｍを計測する大形な住居址である。東辺やや南寄りに竈が設置されている。住居内ほぼ中央には径50cmの皿状の浅いピットが存在し焼土と伴に、一個体分が出土した。又北壁沿いに完形の杯が出土している。８号住（ＰＬ・５上）は３号住に一部破壊されている。一辺４ｍ弱の小形な住居である。四隅に主柱穴を４本配置する。住居内中央に、粘土を敷いた炉址を設置する。北端では、４、５、６号が確認された。４号は単独であるが、５、６号が重複している。４号は２×３ｍの小形な用途不明土壙である。

土壙内には多量の木炭が発見される。床面は固くしまっているが柱穴等は発見されない。５号は一辺約4.5ｍの竪穴住居で隅丸方形である。竈は東辺南寄りに設けられ、壁際には周構が一周する。６号住居は上面は既に削平され、壁高５～10cmを計測するのみで竈等も削平される。

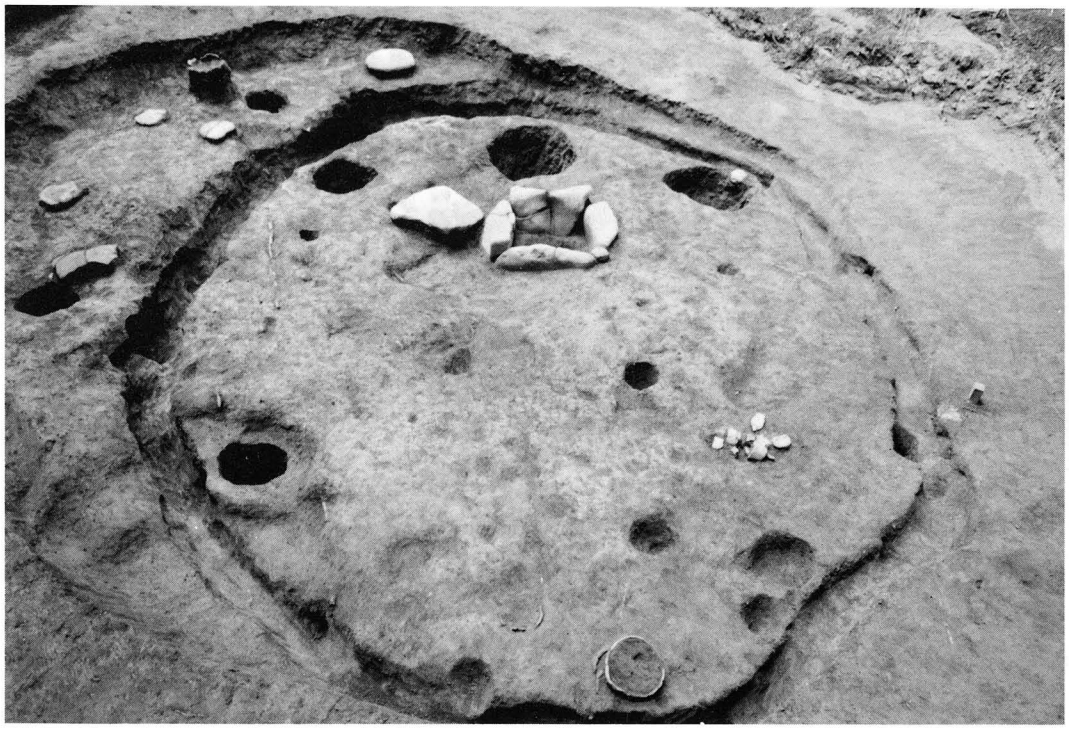
Ｂトレンチは東端で、３軒の縄文時代の切り合い関係が確認された。１号住（ＰＬ・３）は、大形な炉址を設置するが石は小形な石材を用いている。曽利Ⅱ期に属するものと考えられる。又住居内には径１ｍ、深さ１ｍを計る貯蔵用と思われる大形ピットが検出された。住居北半は２号、12号に切られている。12号住（ＰＬ・３下）は２号住に切られ、三ケ月状に残すのみである。一個体分の土器と石皿が検出された。２号住居は、４×６ｍの楕円形を呈する。中央北寄りに石組炉が設置される。主柱穴は５本が検出された。床面は固くしまっている。住居南端には２個体分の埋甕が設置されている。壁際には10～20cmの周溝が一周している。出土土器で特筆されるものには、石組炉内より一個体分の土器の出土がある。二次焼成を受けており、使用時の復元作業に貴重な資料と云えよう。時期は土器型式より曽利Ⅳ式期が主体を占める。トレンチ中央では４軒が検出された。10号、９号は平面プランの確認はなされない。時期は後期の可能性もある。７号住居は井戸尻期に属するものである。11号住は７号住の真下に存在して全容が明らかにされた。主柱穴５本が検出された。中央よりやや北寄りに埋甕炉を設置している。土器型式より中期前葉の新道式期であると判明した。

遺跡発掘風景

遺跡見学会　地元小中学生を対象に山梨大調査会全員の説明が熱心に行われた。



2号、12号住居址（西より）曽利Ⅳ期に属するもので、県内での発見例も少ない。

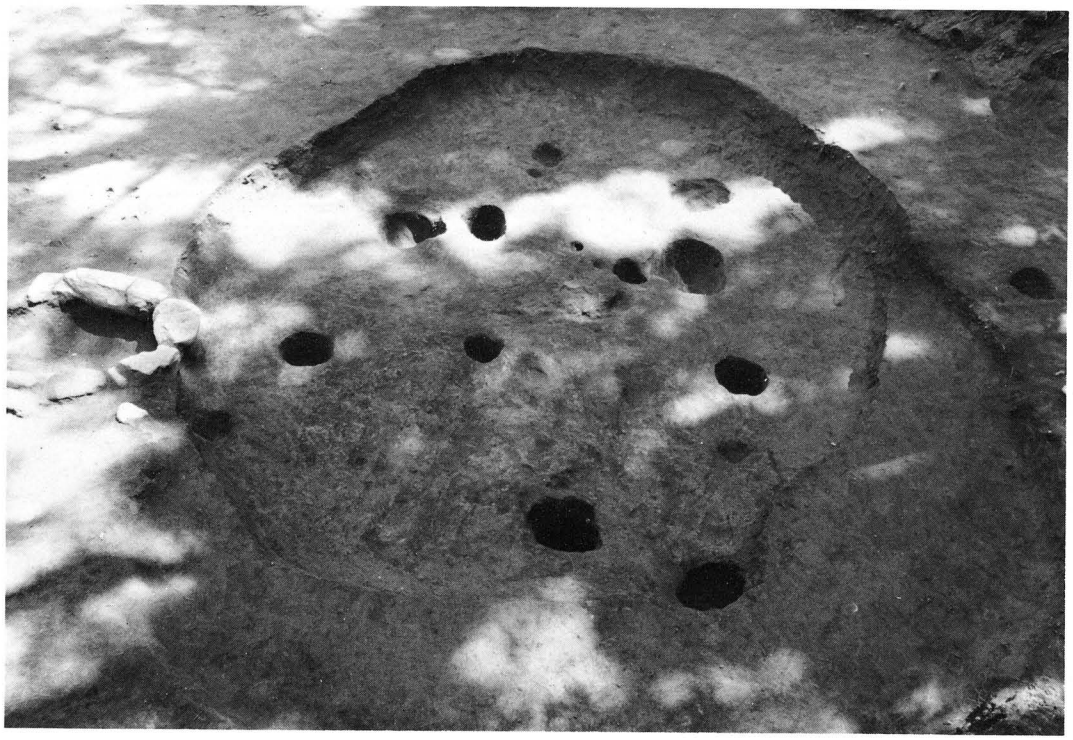


2号住居址（東より）

1号住居址　左端には縦1m、深さ1mの大形な貯蔵穴が検出されている。

1号、2号、12号の切合関係

2号住、12号住セクション・ベルト付
このセクションベルトにより土層を観察して覆土の堆積状態、遺構の壁の確認を行う



11号住居址　新道式期で中央に同時期の埋甕炉を設置している。

8号、3号住居址（8号は弥生）
弥生後期に属する住居で、釜無川上流では唯一の例である。一部を3号住の平安時代に切られているが、柱穴は4本が確認され、中央に炉を設置する小形な住居であることが判明した。

炉址（曽利Ⅳ期）大形な板状の石材を縦に用いた大形方形状な石囲炉である。

炉址（井戸尻期）人頭大の石材を用いている。形状は不正形である。

5号住（平安時代）

3号住（セクションベルト付）

3号竈（平安時代）

2号住炉地内完形土器出土状況
この土器は2次焼成をうけており煮沸用としての用途が考えられ、生活復元の重要な手掛りとなる。

2号住埋甕　南側に位置し入口部に配される。

## 5．出　土　遺　物

縄文前期、中期、後期、弥生、平安時代の各時期にわたる土器、石器類が多数検出された。この結果当遺跡が長い期間使用された重要拠点であったことが認められた。

縄文時代では、前期前半と考えられる無文系の土器片が数点検出された。遺構に伴うものでなく量的にも少い。中期は新道期の住居（11号）の検出の結果、埋甕炉に用いた一個体を得ることが出来た。この一例のみで小破片が数点出土したのみである。藤内・井戸尻期では、資料も少なく断片的であるが、少量の土器片が検出されている。曽利期では１号、２号、12号が検出され、当遺跡の遺物群の中心となっている。特に２号住では、曽利Ⅳ期の一括資料が検出されている。床直上、炉址内とほぼ同時期に相当する土器群が得られ又、埋甕も同型式と認定された。１、12号は切り合い関係の結果土器の一括資料は少く、多くは破片として検出されている。

道具類では、12号住より石皿の完形品がある。床面より10㎝浮上して出土して廃棄品として把握された（ＰＬ・２）。その他では打製石斧が量的に大半を占めるが、石鏃、磨製石斧、削器、磨石等が検出されている。

縄文後期では、完形品は検出されず土器片のみが認められた。沈線文系と区画縄文の二種が認められる。

弥生時代では、後期に属するもので、頸部に櫛描文がある（第14図下段）。平安時代では、土師器の杯、甕、須恵器の甕、杯などがある。この内土師器杯には、「有」「大」の墨書が認められた。

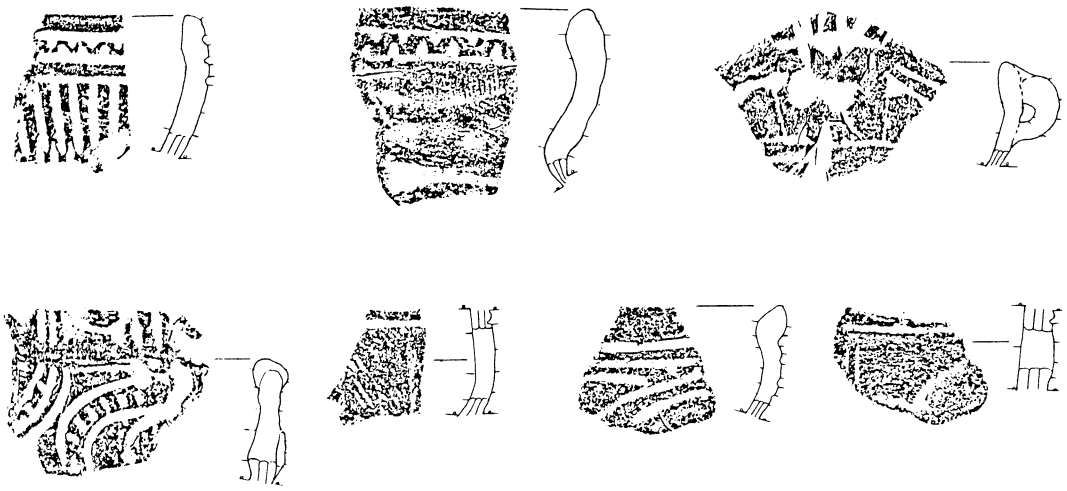


図　3　　向原遺跡土器拓影（縄文中期前半）

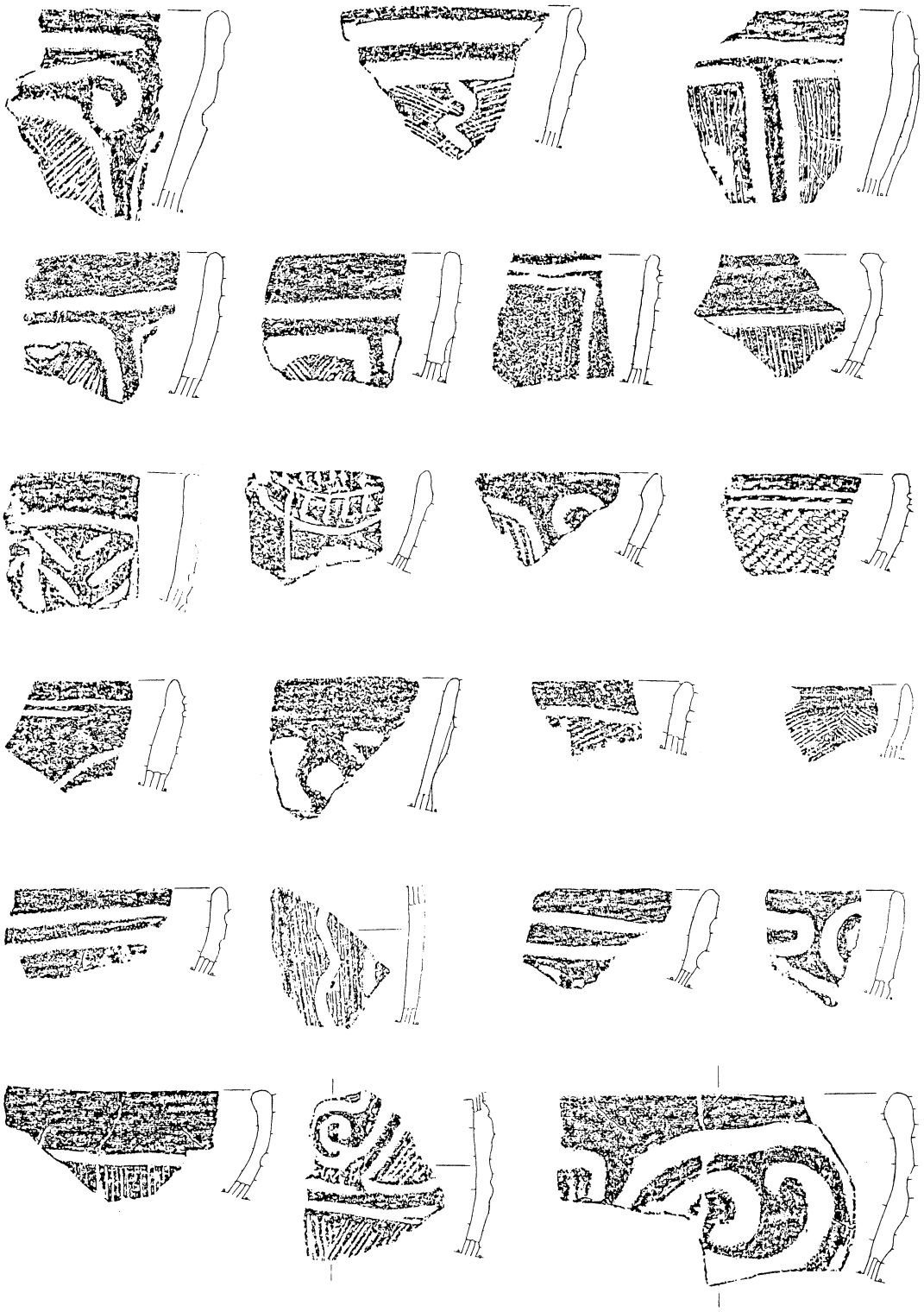


図　4　　武川村向原遺跡土器拓影（縄文中期末葉）

図　5　　武川村向原遺跡（縄文時代・後期）

## 6．ま　と　め

今回の調査は、遺跡範囲確認、規模、それに前年度実施された真原遺跡発掘調査結果の資料保充にかかわる学術発掘調査である。昭和58年度に行った分布調査を踏まえて、当遺跡の発掘調査のはこびとなった訳である。

調査区域は、向原遺跡の約600㎡を対象として、山林の立木を避ける状態でＬ字状に精査を行った。

調査の結果、次のような成果を得ることが出来た。

遺構では、縄文時代・竪穴住居址７軒、弥生時代・竪穴式住居址１軒、平安時代・竪穴式住居址３軒、土壙１ケ所が検出されている。これらの遺構の詳細な検討は報告書刊行までの整理をまってなされるが、縄文では円形、楕円形を主とするのに、弥生・平安時代では隅丸方形に変化する。又縄文・弥生では炉址が設置されているが、平安時代では竈が設置されるのが特長である。遺構の立地や配置については、発掘区域が小規模であるため多くは語れないが、遺跡内には、相当数の遺構が重複して存在するものと考えられる。

遺物では、縄文前期前半～中期～後期、弥生後期、平安時代に及ぶものが認められ、全体的には、縄文中期、平安時代が多く、次に縄文後期、弥生、縄文前期前半の順となっている。

検出された遺構はその出土遺物から、縄文中期、新道式期、井戸尻式期、曽利Ⅲ式期、曽利Ⅳ式期、縄文後期・堀の内式期、弥生後期、平安時代のものと考えられる。

土器は、整理箱で約10箱分ほどが出土しているが、縄文中期の土器が大半を占めている。これらの多くは深鉢の破片が主であり、この内完形に復元可能なものが５個体存在する。

特殊遺物としては、曽利Ⅳ期の埋甕２個体、土隅、新道期の埋甕炉に使用された土器１個体がある。

石器では、打製石斧、磨製石斧、削器、石鏃、石皿、磨石、削片が検出されている。

遺跡は、黒沢川南岸の見晴しの良い高台に位置して、釜無川の支流により分断された東西に長い丘陵上は、縄文から平安時代に至る間大変住みよい条件の所だったと考えられる。

最後ではあるが、調査に当って多くの関係機関および地元の方々に温かいご支援とご協力を賜った。記して感謝の意を表します。

（里村晃一）

昭和60年３月25日　印刷
昭和60年３月25日　発行

向原遺跡（概要）

発行　武川村教育委員会
印刷所　ヨネヤ印刷
甲府市丸の内一丁目14－６